

序論：理論を創る

菊池 城司

この特集のねらいは、わが国において〈オリジナル〉な理論がどうしたら生まれるか、既に生まれつつあるとしたら、どうしたらより多く生まれるようになるかを考えてみようということである。ここで理論というのは、現象の体系的な説明という程度の最も緩やかな意味で用いている（柴野，1986）。教育社会学において〈オリジナル〉な理論というのは、2つの次元においてとらえることができると思われる。1つの次元は、外国（主として欧米）の教育社会学—日本の教育社会学，もう1つの次元は社会科学・人間科学・哲学・思想など—教育社会学である。ここでいう〈オリジナル〉は、2つの次元を交差させてみるとわかるように、それほど単純ではないし、軽々しく〈オリジナル〉などと語ること自体が問題かも知れない。しかし、〈オリジナル〉な理論を創り出すことを、はるかに遠い、究極的な目標として、研究活動が行われていることも否定することはできないと思われる。

最近では、在外研究や留学の機会も増えており、外国の研究者との交流も頻繁となり、「日本」の教育社会学者としてのアイデンティティが問われることが多くなっている。また、研究をめぐる思想的状況の変化に敏感な、アカデミズムの周辺部あるいは外部からむしろ刺激的な作品が生まれていることも、「教育社会学」研究者に反省を迫ることになるかもしれない。

欧米産の理論が、特定国の社会構造を反映し、文化的制約を受けていることは言うまでもない。それらの違いを無視して、わが国に適用するのは疑問であることは、『教育社会学研究』第47集でもくり返し指摘されている。わが国では、学説研究、とりわけ欧米の学説研究を理論研究と考える長い伝統がある。学説研究にとらわれている限

り、〈オリジナル〉な理論は生まれないという意見も少なくない。あるいは、学説研究が必要であることは否定できないとしても、プラス α が足りないという意見も有力である。逆にこの点を強調しすぎると、日本文化・社会の特殊性論に陥ってしまうおそれもある。

ここ20年ほどの間、教育社会学は現象学のインパクトをうけ、さらに、ソーシャル言語学から構造主義・ポスト構造主義などにいたる思想と方法の直接的あるいは間接的な影響をうけつつある。教育社会学の外部において生じたこれらの変化は、主として若い世代を通じて、微妙なかたちで教育社会学に影響を及ぼしている。とりわけ、この影響が欧米の学説研究を経由することが少なくないという意味において、わが国の教育社会学においては、2つの次元はかなり重なり合って現れることになる。しかし、これらの新しい「波」がいずれも特定ディシプリンの理論構造を反映し、その制約を受けていることも否定することはできない。外側の動きにとらわれてそれらを追いかけている限り、教育社会学に〈オリジナル〉な理論は生まれないのではないかという意見も少なくない。また、それらを積極的に学ぶことは必要であるとしても、〈オリジナル〉な理論の創造に活かすには、それらに「何か」が付加されなければならないという意見も有力である。逆に、それを強調しすぎると、「鎖国」して教育社会学の内部に自閉することになるおそれもある。

私たちの多くは、このような知的刺激に満ちたとまどいの中にいる。その中で方向さえ見失うことがなければ、わが国の教育社会学の研究は、「飛躍（ブレイクスルー）」する絶好の時期にめぐりあっているのかもしれない。このようにある意味では恵まれた状態を最大限に活かすには、どの方向に向かって私たちは努力しなければならないのだろうか。言うまでもなく、これに対する「正解」は誰にも見えず、複数の「解答」はあるが、事後的にのみ「正解」との距離が測られるだけである。この特集において、その方向を探る手がかりをいくつか提示することによって、的中させることはできないとしても、逆方向に走るようなことだけは避けたいと考える。

理論はさまざまな経路をたどって形成される。学説研究を積み重ねることによって理論が生まれると信じられている。学説研究から抽象的な概念操作によって〈オリジナル〉な理論がつくられたことがなかったとはいえないだろう。ここでは、そのような学説研究→理論への直接的な経路ではなく、むしろ間接的な経路が重要であることを指摘しておきたい。学説研究は、教育社会学の流行の変化を追いかけて、エピソードになるためにではなく、その底流にある外国の教育社会学者の問題意識、発想方法を察知することによって、自らの研究の目標をどこにおくかを決めるのに有効なの

序論：理論を創る

である。なぜ最先端の教育社会学者たちがある特定の問題に執着するのか、しかも、それが他の国々でも注目を集めるのかは、教育政策や教育問題の展開、教育＝社会構造の変動をめぐる類似性と差異性、「通説」となっていた学説への不満など……、なんらかのかくれた理由が存在するからである。重要なのは、「国際的な流行、とくにその底流を察知しながらも、ある程度それと独立に自分の視点を設定」すること、具体的には「各人に与えられた情報のちがいをむしろ積極的に生かす途を探究」（根岸，1988）することである。

ここでは、「各人に与えられた情報のちがいを積極的に生かす経路をあえて強調しておきたい。フランスの代表的な社会学者たちがつくりだした〈オリジナル〉な理論は、いずれも長期間にわたる事例研究から生まれているという事実」に、私たちは気付いているだろうか。たとえば、クロジェ学派の例によれば、面接調査により理論語を前提としない日常語による記述を膨大に積み重ねる。それに基づいて自由にできるだけ多数の仮説と視点を出す。それをさまざまな角度から事実と照らし合わせて検証していく。「検証された（厳密に言えば、反証されない）命題」と「仮説」は意識的に区別される。1つ1つの仮説の検証を通して、「通説」を覆すような現実についての発見が生まれ、一見「非合理的な」現象の背後にある「合理的」根拠が解明されていく（船橋，1990）。たとえば、ピエール・ブルデューにおけるアルジェリアおよびベアルンでのフィールドワークの経験が、彼の理論に抜き難く投影されていることは、周知のとおりであろう。また、クリフォード・ギアツにおける東部ジャワ、バリ島、モロッコにおけるフィールドワークの経験が、彼の〈オリジナル〉な理論と方法にとってきわめて重要な基礎になっていることも知られている。彼らの実に他方面にひろがっている社会科学的問題関心や理論的興味は、学説研究というよりも、フィールドワークの経験に胚胎しているように思われる。それらを基礎として、たえず比較を繰り返しながら、従来のすぐれた理論と対決することによって、彼らの〈オリジナル〉な理論が紡ぎだされてきたとみることもできる。

教育社会学は経験科学であって、現実と思考との絶えざるフィードバックがあつてこそ、自立的な発想が可能になることを、改めて認識する必要がある。現実と思考とのフィードバックを重視するということは、日本の教育と社会の現実に対して、柔軟に思考しつつ、取り組まなければならないことを意味する。日本社会における教育はデータの宝庫であって、外国の教育社会学者の興味を惹きつけるに足る、多くの経験を含んでいるといわれる。日本の教育と社会の現実に立脚する実証的研究はもとより、そこからヒントを得た理論、つまり外国の研究者が無視していた側面を照明する

理論が生まれる余地はまだ残されていると思われる。問題は、欧米の経験や理論を過度に「普遍的」であると思い込んでしまう点にある。そのため、欧米の理論的枠組で日本の教育と社会を見て、それによって説明できない事態に遭遇した場合、欧米の理論的パラダイムそのものを相対化し、洗練していく途が閉ざされてしまうことになる。

この特集では、外国で提起され、あるいは観察された問題をめぐって理論を展開するという、日本人にとって不利なゲームの支配から逃れて、次の2つのサブテーマから、〈オリジナル〉な理論をつくる可能性を模索する。第一に、選抜や学歴などに表れる「日本的」特徴を組み入れた〈オリジナル〉な理論が、国際比較と主として欧米の理論との対決によって、どのように成り立ちうるのか。第二に、「不登校（登校拒否）」という「日本的」な教育問題から、〈オリジナル〉な理論構築への途がどのように拓かれるのか。この2つのテーマは、いずれも、テクニカルな方法論や抽象的な議論の迷路に入り込まないように注意しながら、できるだけ具体的に〈オリジナル〉な理論への試みを探ってみるために選択された典型的な例に過ぎない。第一のサブテーマでは、先進諸国も開発途上国も避けることができない学歴や選抜のメカニズムの「日本的」特徴を手がかりとして、〈オリジナル〉な理論構成を模索する試みであり、第二のサブテーマでは、わが国にしか見られないとされる「不登校」現象のケース・スタディから、〈オリジナル〉な理論をつくりだす方向を探ろうとする。両者はじつは密接に関連しているとみることもできるので、関連のない2つのサブテーマを単に並列しているわけではない。ただし、両者を強引に結びつけようとする意図はまったくなく、それを期待しているわけでもない。

本特集において、〈オリジナル〉な理論が展開されていないかもしれない。しかし、その方向に向かって少なくとも第一歩が、各論稿において踏みだされているはずである。必要なのは、その過程において、当然のこととして見過ごされてしまう「常識」を相対化することであり、それに基づいてひとつの理論を構成しようと試みることなのである。

〈参考文献〉

- 船橋 晴俊 「フランスの市民生活と研究活動の環境」、『理論と方法』7, 1990
 根岸 隆 「経済学の『原点』から」、『現代経済学研究』, 1988年7月
 柴野 昌山 「概説 日本の社会学 教育」、『リーディングス日本の社会学16 教育』, 東京大学出版会, 1986